垣根の上のキミ

桜時 折枝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
垣根の上のキミ

【Ｎコード】
Ｎ４０２１Ｏ

【作者名】
桜時　折枝

【あらすじ】
魔女。それは魔術に長け、大いなる業績を残した女性。
海の果てにある隠された大陸ゼラハトの北に位置するトトロフ王国。今日ここで一人の少女が精霊魔術師資格を手に入れた。２０年前から急速に魔力が弱くなりつつある大陸では久しぶりの新人誕生である。長い修行と試験を経て、ようやく魔術師として認められた少女は叫んだ。
「新人研修旅行があるなんて聞いてない！」
蒸発中の師匠が教えてくれるはずもなく、少女は知らなかった。

そして正しくは、旅行ではなく修行の旅である。一人前にはまだまだ遠く、修行はつづく。
同行者につっこみをいれ、いれられて、敵と戦い、お土産をあさる。

魔女。そしてそれはもう一つの意味を持っている。
『自由奔放で――手がつけられない女性』
これは魔女を目指す少女と振り回される大陸の物語。魔術が消え始めた大陸の剣と魔術のファンタジー。

魔女さまの序章（前書き）

初投稿になります。拙い文章なので、苦手な方はお戻りください。
気軽、手軽に楽しんでいただけると嬉しいです。

魔女さまの序章

深紅の絨毯と幾重にも重なる刺繍の施されたカーテン。大理石でできた白く輝くつるつるの床。豪奢な調度品と立ち並ぶ近衛騎士。しかし絨毯の先、中央の壇上にある椅子だけは簡素な造りで、少しくすんでいる。いくら丁重に扱っても２００年以上使われ続けた椅子はくすむのだ。これがトトロフ王国の玉座であり、そこに座っているのが現国王である。

「しかし、あれだな。あんなちっちゃかったルハナンが、立派になったもんだよなあ……」

しかし彼は威厳ある国王というよりも、近所の酒場のちょっと太いが気前のいいおっちゃんに似ている。わたしにしみじみと語りかけながら、目が赤くなっていた。

「あなた、お祝いを言うのが先ですよ。ルハナン、今日から正式な精霊魔術師ね。おめでとう。私、とっても誇らしく思っているわ」

嘆息まじりに国王に言いながら、傍に控えていた王妃が微笑えんでくださった。３０歳半ばでいらっしゃるけれど、若々しい……というより、とても可愛らしい。そんな風に微笑まれると、わたしがどきどきしてしまう。王妃がユリの花なら、わたしはきっとじゃがいもだ。せめて花のほうではいたいけれど。

「ありがとうございます。頑張ります」

裾を震える手でつまんで正式な礼をとる。緊張しすぎて微妙に返答が噛み合わないけれど、大目に見ていただきたい。

わたし――ルハナン・クロストは、今日から正式な精霊魔術師だ。魔術師になるためには、師匠のもとで幼いころから修行をし、成年で国家試験を受けなければならない。合格してはじめて正式な資格と魔術を扱う権利が与えられる。資格なく魔術を行えば、長い地下牢生活が待っているのだ。

しかし、なってしまえばこっちのもん、とは師匠の言だけれど、

多くの特権と国からの給与がある。元々は特権もなくたいした額ではなかったらしいが、魔術が消え始め魔術師がレアになり始めているので、今ではしっかり裕福層。基本魔術の好きな研究をしながら、たまに来る依頼をこなす気ままで皆の人気職業だ。

魔術の素養を見出され、生まれたときから師匠のもとで修業してきたから、この日が待ち遠しくて長かった。

国王はすっと玉座を降り、階下のわたしへ小箱をぽんぽんと手渡す。

「ピアスだ。これがお前の魔術師の証明で、まぁ、お守りにもなるな。龍の血ってよばれる珍しい鉱石だからかっこいいけど重いぞ。耳、気をつけろよ」

「あなた！もうちょっと渡し方があるでしょう！せっかくの任命式で、ルハナンだって記念の日なのに。もっと嬉しくなるような演出くらいして下さい」

あまりの気軽さに王妃が目を吊り上げる。でも怖くない……というか、やっぱり可愛く見えてしまうのを王妃は知らないのだろう。

わたしのために怒ってくださることをちょっと嬉しく思う。

「いえ、十分嬉しいです。ありがとうございます」

だから今度は緊張せず、自然に笑顔になりながらお礼を言えた。小箱をしっかりと胸に抱く。

国王はそんなわたしに目をうるうるさせながら、

「旅は辛いだろうが……いつでも帰ってきていいんだぞ？たまには城に顔を見せるんだぞ？知らない人についていっちゃだめだぞ？ご飯はしっかりたべて、体調管理が大事だからな？」

なんだか幼児の親みたいな発言はおいといて、

「……わたし、旅をする予定なんてあるんでしたっけ？」

基本は教えたし、試験勉強は自分でやるものよー。

との書置きを残し、師匠が蒸発したのが2年前。当然教えてもら

えなかった魔術師新人研修大陸ぐるっと一周の旅を出発前日に聞かされた。
新魔術師は修行がてら大陸を1周するのだと。
魔術師の試練で、旅費は国負担だけれど、危険さゆえに帰還者は少ないのだと。
もう生きてはいないと思われるころにひょっこり帰ってくる人も多いとか。
ちなみに師匠は1年で帰ってきたとか。
よし、わかった。わたしは半年で帰ってきてやる。それがわたしの目指す『魔女』への第一歩。

これは海の果てにある隠された大陸で旅をはじめた、『魔女』を目指すわたしの、きっとサクセスストーリー。

魔女さまの序章（後書き）

緊張している主人公より緊張して投稿中です。
権威（王妃）の前ではおとなしいけれど、きっと次回から暴れる主人公。応援してやってください。

1話：魔女さまと美少年

「ねえ、ししょー。ししょーは、まじょさまってなまえなの？」
「あー。名前じゃないわよ。美女にして優秀な私みたいな人は魔女って呼ばれるの。」
「へんななまえ！」
「あらぁ、じゃあルハナンは将来呼ばれたくない？魔女ルハナン様って」
「よばれるの？それってすごいの？」
「ええ、いろんな意味ですごいわよ。私みたいに」
「よばれたら、ししょーほめてくれる？」
「ううーん、まぁ、そうね。ナンバーワンよりオンリーワンは達成できるものね。褒めようかしら」
「じゃあ、なる！どうやってなるの？」
「そうね、まずは男を上手くあしらわないとね。それから、国王を影であやつって、神殿を服従させるのもいいわねえ」
「がんばる！」
「えらいわー。さすが私のルハナン。じゃあ魔女修行しましょう。まずは、パン屋と肉屋でお買いものしてちょうだい。それと、私の服のボタンつけなおして。夕食は肉多めのシチューがいいわ」
「がんばる！」

――――魔術師でも魔女でもいい。貴方がルハナンのままでいてくれるなら。ここで笑い続けていけるなら。

＊＊＊

『オイジアク』
唱えた瞬間。ぱきんっ、とかざした指先から音が鳴った。空間にひびを入れたようなこれが、魔術使用時の音だ。
指先で空中に見えない呪文を描き、さらに呪文を唱えてようやく魔術は発動する。できる限り素早く描き、しっかりと発音する。それが癖になるせいか、一般人からすると魔術師は字が雑で、声が大きいという印象だ。わたしもいささか字には自信がない。師匠は声がやたら大きい人だった。
「さ、入って。とりあえず食事ね」
愛する我が家の鍵を魔術で解除し、客に扉を開けてやる。元々師匠の持ち物であるこの家は、貴族の古城を国王からぶんどったものらしい。王城の威厳を保つため、王都からは少し離れた立地だ。一人で住むには広すぎて、全体の８割は未踏の地だ。
振り返って客を見ると、ぽかんと口を開けて我が家を眺めていた。目線で促し、ようやく食堂へ案内した。元城の食堂だけあって広い。天井も高く、明りを取り入れる窓も大きい。食卓は長すぎて端から端では声が届かないため、実際に使っているのは隅に置いた古ぼけた長机だ。
向かいあって座りながら、王城からの帰宅時に買ってきたパンをほおばった。料理は苦手ではないけれど、いきなり来た客の分の材料が面倒だったからだ。
簡単な夕食を食べ終えて、食後のお茶を飲みながらゆっくり客を観察する。
淡く波立つ栗色の髪は耳にかかる程度で整えられて上品だ。少したれ目がちな目は緑よりは黄緑に近く、しかし明るすぎることはない落ち着いた柔らかな緑が、うつむきがちに手元のカップへそそがれている。神殿のちょっと立派な服に着せられつつある１２歳ほどの幼い顔立ちは、可憐な少女にも見える。これがいわゆる儚げな美少年ってやつか。名前は確か、
「リュウ……だったよね。本当に大丈夫？不満があれば、おっさん

……じゃないや、国王陛下に言っとくよ。わたし結構仲良しだから」
名前を呼ばれたリュウは、ゆらりと視線を上げ微笑んだ。
「いえ、大丈夫です。ぼくは、ぼくの意思で貴方の旅についていきます」
そう、彼は先刻突然決まった（というより知らされていなかった）旅への同行者だ。
「えっとね、そう言われてもな。わたし旅があるなんて知らなくって。キミに聞くのも変だけど、詳しく教えてもえらないかな」
国王との会話では、とりあえず旅してこい、リュウを同行させてほしい、の２つの情報しかわからなかった。
「どこから説明すればいいですか？」
「最初。とりあえず知ってること全部よろしく！」
「国家で魔術師の資格を得たならば、国を出て、世界…といってもこの大陸だけですけど、ルールに従って一周しなければなりません」
「ルール？」
お、さっそく知らない情報が出てきたぞ。こういうことの説明係とかつくっておくべきだと思う。
「はい。まずは、大陸にある５国をすべて回ること。次にそれぞれの聖域にいらっしゃる精霊魔術の源である４大精霊さまに挨拶にいくこと」
「ふむふむ。それだけでもかなり時間がかかるなあ」
季節によっては行けない場所もある。船の移動も必要だ。
「そして、帰ってきたらレポート５０００枚」
「は！？」
「それと今回新たに加わったルールは、国王へ各地のお土産を買ってくること……だそうです……」
なぜかリュウが申し訳なさそうに声を小さくしていく。
「あんの、おっさんっ」
後半のルールは遊びすぎだ。５０００枚なんて読む方が嫌じゃないのか。もう行きたくなくなってきた。わたしインドア派だと思う。

ひきこもり万歳。湿気の多い暗がりでこそこそ暮らしたいのに。
「ルールはこれだけです。本来は、同期の魔術師と旅によって絆をつくり、経験をつませるのが目的なんだとか。昔は5，6人で固まって旅をしたんだそうです」
「ありがとう。……でも、20年ぶりの新魔術師がわたし一人だけなのに、絆もなにもないわね……。難度と経験値が上がるけど。それで一人旅だと不安だから、魔術師でもないキミを同行させろ、と」
「えっと……ごめんなさい……」
たれ目な目元をさらに下げるリュウ。いま、しゅんっていう効果音が聞えた気がする。
その可愛さにほだされそうになるけど、待て待て、国王とリュウの目論見を見破らないといけない。魔術師に行かせる修行になぜ魔術師でないリュウを連れて行けというのか。そしてリュウ自身になんのメリットがあるのか。あんなおっさんでも親しげでも、王は王だ。目的なく人を動かすことはないし、個人より国全体の流れを優先する。安易に考えると、いつのまにか面倒事に巻き込まれる可能性だってあるのだ。ちょっとまじめになろう。
わたしは、あえて露骨に疑わしい顔をしてみせた。眉をひそめたまま、相手をじっと見つめる。良心が痛まなくもないけれど、まずは身の安全確認。
「……一応、魔術の素養はある、みたいなんです。だから神殿に保護されて」
「保護？」
「数年前、記憶喪失で倒れていました。自分の名前もわからなくて、リュウっていうのは神官さまがつくってくださいました」
記憶喪失。このご時世じゃなければご都合主義の御伽話だったろう。最近ではめずらしくもない。三軒先の肉屋のクレイズさんちのお嬢さんも記憶喪失で苦労したとか。夕食のパンを作ったパン屋の見習いは、記憶喪失のところを親方に助けてもらったんだとか。嫌な世の中になったもんだねえ。

けれど珍しくないからこそ、当たり障りのない嘘にも使える。
「そう。この旅についてくる理由は？」
「神殿で魔術を教えられる人がいないからです」
リュウはよどみなく、わたしから目をそらさずに告げた。柔らかな緑はわたしを映している。この子はいま、わたしに試されていることを理解しているのだろう。賢い。
しかし、内容は信じたくないものだ。
「待って、神殿は光魔術の総本山よ。魔術が消えかかって、使えなくなることが増えているとは聞いてるけど、そこまで進んでいるの？5万人がいるのよ、神殿には。神殿長さまも？巫女も？」
「魔術の素養を失っていないのは、ぼくだけです」
「……そんな」
魔術には2種類がある。わたしの精霊魔術と、神殿関係者が操る光魔術だ。精霊魔術は、空気に溶けている精霊の力を借りて火・水・風・土を操る。そして、
「光魔術が使えないならば、医療はどうなるの……？」
光魔術は大陸神ユラン様の力を借りて、時と癒しを操るのに。今現在、誰も医療を施せない。
「だからルハナンさんについていきます！旅の雑用でもなんでもしますっ、僕に魔術を教えてください！」

空気に聡く、賢く。誠実。素直な美少年。なにより、私や国に、害をなす気配がない。
わたしは初めて、リュウににっこり笑いかけた。
「出発は明後日にしましょう。本当は明日って言われたけど、二人分の準備をしなくては。初期魔術の準備もいるしね」
歓喜した栗毛の少年は、飛び上がってカップを割ったけれど。
キミは今から、わたしの旅の仲間。
他人には厳しく、味方には甘く。師匠が教えてくれた『敵をつく

りつつも気ままに生きるための魔女のコツ』だ。

そう決意したとき、リュウの後ろで水しぶきが舞った。
いや、これは。
窓ガラスの破片。

ようやく認識が追いついたところで、音もなく食堂全ての窓ガラスが割れた。

1話：魔女さまと美少年（後書き）

人をこき使うのが大好きな師匠。子供にも容赦ありません。

2話：初バトル（前書き）

スプラッタはありませんが、軽くグロい表現があります。苦手な人はお戻りください。

2話：初バトル

ガラス片がきらきらと舞いながら降り注いでくる。
ぽかんと口を開けて見上げている少年のふっくりした頬に触れる。
―――直前、
『ウープネス！！！』
わたしの指と口が勝手に動いた。パキンという音と同時にわたしとリュウの真ん中から強い風が起こり、ガラス片は全て弾きとぶ。

「リュウ、廊下へ！」
鋭く名前を呼ばれ、リュウはようやくはっと駆け出した。見送りながらその横で今度は集中して呪文を描く。
『ウレ・アマクト』
指先から放たれた風が5本の鎖になり窓から侵入した5つの影を縛り上げる。影たちは各々鎖をかわそうと横へ跳ぶが、風は追尾機能万全。加えて、風精霊は発動が速い。
縛り上げられ、芋虫よろしくぼとぼとと床に落ちた影を確認してようやく息を吐いた。侵入派手だけど弱いなあ。
そっと影に近付き、敵を確認する。
「……うげえ、なにこれ。人……じゃあないよね。」
手足を体にくっつけるようにして縛られた影は、まぎれもなく人型をしている。けれど、影なのだ。顔もなく体つきもない。出来の悪い黒い粘土人形が動いている。窓を突き破ったのに、体にはなんの損傷もないようだ。まだ戦意はあるのか、鎖を解こうと床でびちびちとのたうち続ける。
ホラーか、ホラーなのか。魔獣や強盗も怖いけれど、これはもっと嫌だ。なんというか、気味が悪い。夢に出そう。
びちびち。びちびちびち。びちびちびちびち……
思わずじっと観察しながら固まっていると、ぱたぱたと軽い足音

が戻ってきた。音がしなくなったのに気付いたのだろう。
「ルハナンさんっ、どうなり……うっわー……」
「うわーとしか言えないよねえ、やだよねえ、これ。しまった、切り刻むべきだった。のたうっているよりマシだよ。よし、さばこうか」
風の真空攻撃をしようと伸ばした指先を、リュウが軽く押しとどめる。
「落ち着いてください、中身が出たらもっとトラウマです。外に屋根から吊るしておきましょう」
落ち着いてというわりには、リュウも言動がおかしくなっている。
「いやだ、ご近所さんに悪趣味だって言われるじゃない。吊るしたって明日晴れにもならないよ」
「では、埋めましょう。地精霊に頼んでください」
「這い上がってきたらいやだーっ」
それだと芋虫というよりミミズのようだ。
「では、凍らせて埋めましょう。水精霊でできますよね」
涙目でこくこくうなずいて賛成する。ナイスだ、リュウ。

『エテサロック』
ぱきん、と五体氷結。ううう、うねっているそのままの形で凍ってる。
なるべく見ないようにしながら、
『ウォシアム』
埋葬。床から土が盛り上がり、氷漬けを取り込んでずぶずぶと潜り、床も元通りに収まった。ひとまず完了。
「あーもう、何あれ、何っ。魔獣であんなのいないよねっ。魔獣なら師匠と倒したことあるもの！でもあれ人でもないし、なーにーあーれー！」
ほっとしたせいか、我慢できずにひたすら叫んでしまう。叫んで発散してこの気持ち悪さが消えないだろうか。

リュウが若干蒼白になりながら食堂から出るように促してくれた。この部屋2度と使いたくない。下にあれが埋まってると思いだしてしまう。

自室で毛布にくるまり椅子の上にちぢこまって、ようやく落ち着いた。魔術師らしく本が床に積み上がっては崩れ、怪しい小瓶やら薬草がそこかしこに置いてあるから触ると危険だ。

リュウはここも不気味だとつぶやきながら、ぐるりと部屋を見渡している。もしもし、聞えてますよ。

「ところでリュウよ。キミは冷静だったねえ。修羅場でも経験してきたのかい」

「……そうですか？本当は悲鳴をあげる余裕もなかったんです」

さらりとわたしの詮索をかわし、苦笑しながら厨房で入れなおしたお茶を手渡してくれた。やはりこの子は、気がきく。大人と会話をしている気分だ。

「パニックを起こされるより良かったよ。で、あれは何？知ってるよね」

気味悪がってはいたけれど、得体が知れないとかわけがわからないという態度ではなかった。

リュウも誤魔化せないとわかっているのか、小さくうなづいた。

「あれは、魔物です」

「まもの……」

「神話はご存じですよね」

「むかしむかーしのことじゃった。大陸の向こうには果てしなく大きい世界があったのじゃ。わし等の先祖さまの故郷じゃったが、相次ぐ戦乱によってこの地へ逃げてきた。しかしこの地は、戦乱よりひどい魔物の住む荒れ地。人が住めるはずもないが、もはや帰る場所もない。人々はこの大陸の神に祈った。どうか助けてくれろ、と」

「そこまでいいですけど……えっと、おばあさんの真似、お上手ですね」

「ほめてる？」
「ともかく、その魔物です。太古に存在したというあれ。最近復活して、２０年前に再び滅ぼされたはずですけど」
なるほど、１７歳のわたし見たことがないはずだ。けれど２０年前の事件を知らない人はこの大陸にはいない。会ったことのない母も、３軒隣の肉屋のクレイズさんのお嬢さんも、パン屋の見習いくんも、たぶんリュウも被害者なのだから。
「あー。２０年前の一連の事件のね。なんでそんなものが今更、とか言ってもわからないか。前はどこで見たの？」
「神殿に保管されていた標本です」
あれを標本に……神殿ってすごい。うちの師匠が毛嫌いしててごめんなさい。
「うちを襲撃した理由は、わかる？」
「……たまたま、ではないです。世間から魔術が消えかかっている中で、この家にルハナンさんとぼくの大きな魔力を感じたんじゃないでしょうか」
うん、地味に自慢してるけど、まあ確かにリュウの魔力は大きいからいいや。
「そっか。じゃあ逆に旅にでるのは良かったかもね。このままだとまた出そうだし」
「はい。次は最初から氷結でお願いします」
リュウが今日見せた中で一番真剣な顔でそうつぶやいた。

その後明日に備えてすぐに眠りについたけれど、やっぱり夢にあれが出てきた。
毎日出てきたらどうしよう。寝言で魔術放っちゃうかも。気をつけよう。
リュウに当てたら一大事だから。

2話：初バトル（後書き）

軽いグロっていうか……。元ネタは百足です。殺虫剤かけたらしばらくうねって息絶えました。トラウマです。

呪文はちゃんと考えてつくってますが、覚えてはいません。同じの使うとき間違えそう。

3話：魔女さまの庭

耳につけた涙形の深紅のピアスが視界の端で揺れる。たしかに少し重いけれど、慣れると心地よい重さだ。

力ある鉱石はいつ触っても冷たいものなのだと聞いたことがある。ピアスが頬に触れると少しひんやりしたけれど、わたしがこれを外すことはないだろう。

これが、魔術師の証。

＊＊＊

「クレイズさーん！」

大きく手を振って、角を曲がりそうな人を呼びとめる。白い石畳と白壁、赤い屋根の家々が王城を中心にぐるりと都を成しているトトロフ王都の片隅である。

東門間近の商店街大通りで、見慣れた人物を見つけて嬉しくなる。我が家は東門から出て畑しかない道を馬車で２０分。クレイズさんは東門から3軒目の肉屋でご近所さんだ。

クレイズさんはぽってりした体を上手く人ごみに滑らせながら、近づいてきた。

「ルハナンちゃん！久しぶりだねえ、試験は終わったのかい」

「はい。クレイズさんのコロッケのおかげです。無事に合格できました！」

ぺこっと素直そうに頭を下げる。ご近所づきあいって大事なもので、そこから噂が広がることだってあるのだ。都内の噂を広めるの担い手は、普通に生活する人々なのだから。

「そう言ってくれると嬉しくなるよ。ルハナンちゃんじゃなくて、魔術師さまって呼ばなきゃね！」

「まだまだ修行中です。師匠みたいになれる日は遠いです」

苦笑しながらそう言うと、クレイズさんはちょっと唇の端をひき

つらせた。
「あ、はは。いやルハナンちゃんはルハナンちゃんのままで十分さね……。ところで、そっちの坊やは？」
わたしの横で口を挟まず微笑んでいたリュウに目をむける。
リュウはいきなり話題をふられて、ちょっと慌てながらもしっかり頭をさげた。
「あ、リュウといいます。神殿のもので、ルハナンさんの友人です」
いつ友人になった。１７歳と１２歳では見た目で友人には無理があるだろう。大人びているのに、たまにやらかすなあリュウ。
「そうかい、可愛いお友達だね。相変わらず面食いだねえルハナンちゃん」
「そんなんじゃありませんよ？親戚の弟みたいなものです」
「なんだい、残念。この子は成長したら良い男になるね、つかまえときな！」
クレイズさんはいい人だけれど、たまに会話が通じない。不思議だ。
リュウもさすがに反応しづらいようで、笑ってごまかそうとしている。
「今日は買い物かい？あいにく今日はいいもんがなくてね。明日なら、ちょうど美味しい牛を仕入れるんだけども」
「ありがとうございます。でも、その、実は修行の旅に出ることになりまして」
驚いて寂しがってくれるかと思ったが、クレイズさんは意外にも大きく頷いた。
「ああ、魔術師さまにはそんなものもあったね。そうかい、ルハナンちゃんも旅立つのかい」
そんなに有名なものだったのか。だから何故だれも教えてくれなかったのだろう。
思わず心の中で愚痴をつぶやいていると、クレイズさんのまるっとした大きな手が、わたしの頭をなでた。温かくて、なぜか安心す

る。
「ちゃんと帰ってきておくれよ。そしたら商店街みんなで祝おうじゃないか！約束だよ」
「はい」
嬉しくて気持ちよくて少しだけ目を閉じると、隣でぽつりと死亡フラグとつぶやく声がきこえた。街の雑踏でクレイズさんには聞えてないけれど。
なんだかリュウの性格がつかめてきたぞ。

クレイズさんと別れてから、再び旅の準備にとりかかった。
買うものはたくさんある。地図とランプ。火魔術があるのでマッチはいらない。水筒と毛布。丈夫なロープ。いや別にサバイバルをする予定はないのだけれど、野宿をすることも多いだろう。
旅費はすでに受け取っているが、一応金目のものを換金しておき、少しだけ身につけ、残りは3つ買った水筒のうちの1つに入れた。
リュウが身につけている神殿の服は、真っ白な生地に金糸の刺繍がほどこされ、足首まで覆っている。旅装どころか商店街ですら浮く格好だ。たかだか保護した少年に神殿がこれほど気を使うのは、持っている魔力のせいだけなのか。けれど神殿の者という便利な肩書は欲しいので、王城の小神殿に修行服を取りに行かせた。
その間にわたしは自分の旅装をそろえなくてはならない。
普段から通っている古着屋をのぞく。倹約する必要はないけれど、服に凝る趣味もないのだ。師匠には、物の価値を見抜く目を持つためにも、色んなものを着ろと言われているが。
手にとったのは、黒いワンピースだ。膝下までの丈で、袖と裾に白いラインが入っている。その上に臙脂色のケープを羽織る。これで温度の変化にも対応しやすい。
常連客ということで、試着させてもらう。
鏡をのぞきこむと、銀髪を短く束ね、尻尾のようにちょっと垂ら

している深紅の瞳の少女と目があう。
少女がつけている瞳と同じ色のピアスがゆらゆら揺れる。それが何度見ても嬉しいのだ。
ぐるんぐるん肩を回し、大きく腰をのばして体をほぐしてみた。動きやすく、汗も吸収しやすそうだ。
「うん、こういうワンピースってお腹が出てみえやすいのよね。太らないようにしようか」
一人でうなづきながら、1式購入。

夕方噴水前でリュウと合流するまで、商店街の顔なじみに出発の挨拶をして回った。国王に似ている酒場のおっちゃん、パン屋の親方さんと見習い君。宿屋の双子レジィとコジィ。真っ白な髭を伸ばした馬屋の御隠居さま。門番1号、2号さん。

満足いく買い物にふんふん鼻歌を歌いながら、石畳でステップを刻む。商店街の人ごみは別に好きではなかったけれど、しばらくここへも来られないんだなと思うと街並みを一つ一つ眺めてしまう。

ここが、わたしの故郷なのだ。

3話：魔女さまの庭（後書き）

ついに噂のクレイズさん登場。おかしいなあ、なかなか旅立ってくれません。
ようやく主人公の外見を述べる機会が登場しました。一人称で進めると主人公自体の説明って入れにくいですね。

4話：修行と穀物と

馬車に揺られてすでに6時間、そろそろお尻が痛くなってきた。
王都と家の間を毎度馬車で往復するわたしはまだ慣れている方だけれど、
「あと、何秒です、か、何秒で着き、ますか……？」
「秒どころか、4時間以上かかるってば」
緑の瞳をうるませながら息絶え絶えに聞いてくるのは、ローブ型の修行服に身を包んだリュウである。ゼラハト大陸北端の小島、神殿出身のリュウにとっては馬車より船旅のほうが得意だろう。
王都を出てから南西に進み馬車10時間程度で着くのは、穀物の大産地コロムの街だ。そこに一泊してから、さらに南下し数日かけて国境を目指す。せっかくなので、王都からコロム経由で国境まで旅するキャラバンの馬車に、護衛として格安で乗らせてもらっている。コロムの街付近は安全だが、国境付近では盗賊や魔獣の群が出るため、魔術師の護衛は重宝されるらしい。わたしは国境どころかコロムの街さえ行ったことがないけれど。
残りの所要時間に蒼白になるリュウを眺めながら、
「はあ……。まあ初日から無理させても続かないか。今日は特別サービス」
空中に呪文を書き込み、唱える。
『イオーネザク』
やわらかな風がわたしとリュウのお尻をつつむ。本当は、戦闘時の攻撃吸収魔術である。馬車の揺れ程度の衝撃に使うってちょっと斬新。
リュウがほーっと満足気に息をついた。
「楽になったところで、せっかくだし修行の続きしてなさい」
そう言って、魔術陣の描かれた紙と、荒くて安い紙、羽ペンを渡す。

嫌がるかと思ったが、素直に一式受け取ると、昨日教えたとおりに取り組みだした。
効き手ではない方で、魔術陣をえんえんと書き写す作業だ。
「それが、魔術の修行か。何をしてるんだ？」
静観していた同じく護衛のお兄さんが話しかけてきた。魔術師ではなく、日ごろから傭兵なんかを生業としている強面の人物だ。一緒に風クッション魔術をかけようかとも思ったが、侮辱と受け取られても困るのでそのままにしていた。こういう人々は体力や身体にプライドがある。
「ちょうどいいや。リュウ、この修行の目的をあててごらん」
説明してもいいのだが、自分で気づくことが重要。
リュウは手を休めて顔をあげ、よどみなく答えた。
「両効きにして、どちらの腕でも魔術が発動できるようにする、ですか？」
「五割。もうひとつ」
「えっと……。あ、２つの腕で同時に呪文を発動させる？」
正解だ。ふわふわの栗毛をがしがしとなでてやる。あ、ちょっと迷惑そう。
「呪文を言うのは１人で同時にはできないから、ほぼ同時発動、くらいだけどね」
お兄さんが感心するようにうなづいた。
「面白いな。では、その魔術陣はなんだ？」
「腕は２本しかないから、１人で同時に発動できる魔術は２つまでになってしまいます。３つ以上発動させたいときは、あらかじめ魔術陣で呪文だけ描いておくんです」
ちょっと嬉しそうなリュウが答えた。そう、そして発動したいときは読み上げるだけでいい便利なシロモノだ。
「ちなみにこれは、火、水、風、土すべての防御呪文を組み合わせて、完全防備をするための陣だよ」
今の攻撃吸収魔術も入ってます。リュウは光魔術しか使えないか

ら、わたしが使うためのものだ。護衛準備と部下の修行を一気にこなせる効率的なアイデアですよ。
「描きこまれてる内容が多いと、並みの魔術師じゃ使えないけどね。そうそう、リュウ。人の限界は2つ同時までじゃない」
「……え？でも」
「わたしの師匠は、両足の指でも呪文が描けたから4つが最大。あ、でも真似しなくていいから。あれは例外だからね」
ちなみに足を使うときは、重心をかかとに乗せてちょっと間抜けなポーズだ。わたしは覚えたくもないから覚えなかった。そこまではしたくない。
「……魔術師は苦労するな」
「足はこのままでいいです」
2人がそれぞれに苦笑していた。

＊＊＊

くあーっと目いっぱい背伸びして解放感に浸る。
季節は初秋。カシと呼ばれる山吹色の穀物がたっぷり実をつけ、視界いっぱいに広がっている。コロムが黄金の街と呼ばれる所以だ。
馬車は何事もなくコロムへ到着し、商売に走るキャラバンの方々や仲良くなったお兄さんと別れて宿屋へ向かった。
入口にあるカウンターで談笑している客と街の人、看板娘が、物珍しそうにわたしたちを見た。
「まぁ、魔術師さまなんて久々に見たわ」
「若いのにたいしたもんだ」
「おお、ちょうどいい！お願いします、うちの水車見てください。最近とんと不調で」
一人が言うと、うちもうちもとわらわら取り囲まれてしまった。
こういった大きな街にはたいてい精霊魔術師が2，3人住み、街の整備や住人の頼み事をこなすはずなのだが。
尋ねると、人々はそれぞれ溜息をついた。

「それがな……。うちには4人いたんだが、3人とも何年か前に魔術が使えなくなっちまって」
「今、多いっちゅうからねえ。なにが原因かわからねぇけども、精霊さまのお怒りでもかったんじゃねえか？」
「ロトスんとこの弟がまだ魔術師やってるが、病気で半年前から伏せっててなあ」
無精ひげはやしたおじさんが言うと、看板娘が何ともいえない顔をしてうつむいた。
「おお、すまんなリンテル。いやなに、すぐ良くなるさ！」
「そうだよ、花嫁がそんな顔おしでない。あんないい子なんだ。大陸神さまも見放したりしないさ。」
なんだか空気が重くなってしまったので、さっさと住民の頼みを引き受けた。こういう雑用も魔術師の役目であり、無視できない。
ぎゃんぎゃんとありえない音を建てる水車を直し、温度が下がる竈の様子を見て、街中に出現した底なし沼を埋めた。どこの街でもよくあることばかりで、王都でもたまに師匠が同じように直していた。

長旅アンド一日の働きを終え、ようやく宿にもどってぐったりするわたしを、リュウがせっせと介抱してくれた。リュウはずっと部屋で修行していたのだ。
「夕食は食べられそうですか？さっきリンテルさんが持ってきてくれたんですけど」
「食べる！」
大産地だけあってここのカシ料理は評判だ。このためにコロム経由のキャラバンに乗ったと言っても過言ではない。
リュウが目をまるくするスピードで平らげ、満腹になると眠たくなってきた。
「たいへんおいしゅうございました……。満足～。おやすみなさーい」

そのままベッドにパタリと倒れてると、またもやせっせとリュウが毛布をかけてくれた。

夜半。

隣りのベッドで、すぅすぅと子供らしい寝息を立てるリュウを眺める。割合夜目はきくほうなのだ。

寝た振りをしながら、待つ。

あと3歩、あと2歩。1歩。

頭上できらりと銀が光る。

「こんばんは、お兄さん」

声をかけながら、ナイフが振り下ろされる前に相手の腕をつかみ、手刀でナイフを叩き落とす。そのまま腕をひねり、床に押し付けてやった。

完全に侵入者を拘束したところで、リュウがランプを灯した。

「ごめんね、実は体術も得意なんだー」

あくまで朗らかに声をかけるが、馬車で仲良くなった傭兵のお兄さんは、まだ暴れようとする。

「しょうがないなぁ。リュウ、あれ」

長年連れ添った夫婦よろしく、指示語だけでナイフ手渡してくれる。うん、よろしい。

ぴたりとお兄さんの首筋に添えてやると、さすがに大人しくなった。

「なんでこう連日厄介事が起こるかなあ。なんか憑いてる？」

お兄さんに尋ねると、

「弟を殺しに来たやつが、呑気なことをっ」

強面で睨みつけられた。うーん、話が見えない。

4話：修行と穀物と（後書き）

便利な小間使いになりつつあるリュウ。一家に一台あると便利です。

5話：犯行の原因（前書き）

軽いグロ表現があります。
また先端恐怖症の方はご注意ください。

5話：犯行の原因

このままの体制は疲れるので、
『ウレ・アマクト』
風の鎖で拘束しなおして完了。とりあえずお兄さんを床に座らせる。
「安眠妨害で訴えるよ、まったく。しかも何か勘違いっぽい気配がぷんぷんするし。傭兵ってそんな単細胞でできるの？キャラバンの人もこんな護衛じゃかわいそうね」
言ってるうちに腹が立ってきて、途中からすごく嫌みっぽくなってしまった。本物より言葉のナイフの方が扱いやすい。
わたしがぶつくさ言っていると、リュウがもう一人の下手人を連れてきてくれた。
震えながら部屋に入ってくる人物を椅子に座るようながす。拘束の必要はないだろう。
リュウが安心させるように微笑む。
「料理すごく美味しかったですよリンテルさん。でも、眠り薬のスパイス、ぼくはあまり好きな味じゃありませんでした」
言われてびくりと縮こまるのは宿屋の看板娘リンテルちゃんだ。リュウより少し年上らしく、深い紺色の髪と目が印象的な大人しい系の美人だが、その目は涙でいっぱいになっている。
「リュウ、あんまりいじめすぎないで」
「前から思ってたんですけど、ルハナンさんって美形にだけ態度違いませんか？」
「当たり前でしょ」
差別するわけじゃないけど、かわいい顔でうるうるされると、ね。不満気なリュウだが、キミもわたしの中では美形扱いなのだよ？
だからといって許すかというと、それは別問題だ。
先ほどのナイフ（本物のほうだ）の切っ先を、今度はリンテルち

ゃんの目に突き付ける。
「やろうとしたら、やられても文句ないよね？」
「ひっ……ご、ごめんなさいっ」
「それはこちらのセリフだ！お前たちは弟を殺しにきたのだろうが！リンテルに手をだすな！」
だから何を勘違いしているのか。説明するまえに訳も分からず怒鳴られると、ますます腹が立ってしまう。
風の鎖の位置をちょっとずらして、お兄さんの口をふさいだ。
「少し黙ってて。先に言っておくけど、名前も知らないお兄さんの弟なんて知らない。だれかを殺しにきたわけでもない。修行の旅でここを通ったら、眠り薬を盛られるわ、寝込みを襲われるわ」
「ちなみに、ぼく解毒剤持ってます」
「ちなみに、わたし毒効きにくいから。師匠に鍛えられててさ」
いえーい毒効かなーい。リュウと目線をあわせてハイタッチ。
軽すぎるノリにお兄さんは身体をぷるぷる震わせている。
もちろん挑発したのだが、リュウも鬼畜だな。
魔術師を倒そうと思ったら、まず指と口を狙うのが定石だ。傭兵のお兄さんがそれを知らないはずもない。眠り薬が効いていると思ったからこそ、いきなり急所を狙ってきたのだろう。なぜリュウが解毒剤を持っているのかは知らないけど。
「で、説明してくれる？くれないなら、ぐさっといっちゃうよ？」
白状しやすそうなリンテルちゃんに頼んだ。
「は、はい……。私とロトスさんは、キリハくんが大事なんですっ、だから我慢できなくて」
「あー。人間関係明確に。ロトスってのはこのお兄さんで、その弟がキリハくん。で、弟のキリハくんって確かこの街の魔術師。合ってる？」
「そうです……」
このお兄さん――もとい、ロトスはこの街の人だったのか。この街唯一の魔術師はたしか、

「キリハくんは、半年前から伏せってるって聞いたけど、なんかやらかしてたの？」
殺されると思い込むほど、やっかいなことでも引き起こしたのか。
聞くとリンテルちゃんはいよいよ泣きだした。首を横に振るたびに、涙が散る。そういえば、リンテルちゃんはキリハくんの花嫁って……。
「いいえ……！優しい人です！どうしてキリハくんが、こんな風になったのか、分からないんですっ」
「こんな風って？キリハくんは今どうしてるの？」
「……宿の地下室に……閉じ込めてます……」
「いい人だけど、理由があって、宿に閉じ込めてる。殺される可能性がある。うーん、ごめん、はっきり言っちゃってくれない？」
考えてもよくわからない。勿体つけずに、さくさく教えてほしい。
リュウが隣で青ざめ、まさかとつぶやいた。
「あの病気の再発ですか？」
「違います！彼は、優しいままですっ。キリハくんのままですっ」
興奮してリンテルちゃんが泣きわめく。激しい否定は肯定だ。これ以上聞きだすことはできないし、その必要もない。
ロトスの風の鎖を口と足だけ解いてやる。
攻撃されたわけでもないのに、ロトスは痛みを堪えるような顔で、黙っている。
一昨日と今日と、なぜこんなに遭遇してしまうのか。ブームなんですか。
２０年前まで、とある病気が魔力ある人々だけを襲っていた。
「地下室に案内して」
「……頼む、殺さないでくれ。あいつしか家族はいないんだ！」
「聞いちゃったからには、放っておくわけにはいかんでしょうが」
ロトスが襲って来なければ、わたしだって何事もなくこの街を旅立ったのに。知りたくなかったよ。殺したくないよ。でもそれは、誰のためにもならない。

「キリハくん――いや、元キリハくんの魔物の居場所を教えて。……手伝えとは言わないから」
２０年前まで、魔力ある人が魔物に変わる病気があった。魔物は無差別に人を襲った。襲われた人に家族が多かったのは、一番近くにいたせいだった。
家族では魔物を殺せない。友人でも恋人でも知り合いでも殺せないだろう。だから、元の人物を知らない通りすがりが一番いい――わたしたちのような。

＊＊＊

地下室というか地下にある物置が正しい。
なんとか鍵を受け取って、カウンターの奥の階段から地下へ入ると、一室だけ扉が頑丈に作られた部屋があった。
そんな都合のいい部屋があるのかと聞いたら、２０年前まで同じ理由で使っていたそうだ。魔物になってしまった人を殺せず、閉じ込めておくための場所。そんな曰くのある場所だから宿の主人も普段は開けないらしい。
扉の前で、リュウと2人、息を整える。残る2人は置いてきた。
「空けるよ」
鍵をはずし、やたらと重い扉を押した。
月のささない地下の部屋は真っ暗で、リュウのもつ灯りがなければ、指先すら見えない。
こつこつと靴音が響くと、奥から低いうなり声があがった。
目を凝らすと、影が見える。
後ろでリュウが内から扉をしめた。万が一にも外に出してはいけない。
「がああああ……」
標的をわたしに向けるため、あえて大きな足音を立てて近づく。
ゆらりと身を起こす影はよく見えないが、赤いピアスは闇の中で

も輝いていた。キリハの魔術師の証明であるピアスだ。
「こんにちは、キリハくん」
「ぎぃいいい……」
「ルハナンさん、無駄です」
「わかってる。でもね、挨拶は人の礼儀。礼儀くらいは、払う……来るよ！」
イノシシよろしく真正面に突っ込んでくる影から、2人左右に逃れる。速い。
わたしに狙いをさだめてくる、ランプに照らされたその姿は、
「ゴブリン……？」
絵本に出てくる悪鬼に似ている。人には見えない。頭ばかり大きく、手足がほそく短い。深緑色のぬらりとした身体。目がある場所は、窪んでいて何もない。尖った耳についているピアスが非常に浮いている。
一昨日の魔物とは全く違う出で立ちだ。これがキリハくんの成れの果て。
『エテサローク』
パキンと音がし、ゴブリンの足から氷が覆い始め、体全体にも及ぶ――前に、相手からも空間を割る音がした。
「魔術――いや魔法！？」
ゴブリンの指先から紫の霧がでる。それがゴブリンの足に届くと氷が溶けた。相手の魔術を無効化する闇魔法。
精霊や大陸神の力を借りて行う人間の魔術とはちがい、魔物や魔獣は、自らの力で不可思議な現象を起こす。それが魔法であり、呪文も詠唱もいらない。魔獣は半精霊の存在であり、自分の属性の魔法を使う。魔物はどの魔物でも闇魔法だが、その効果は
「反則的だよなあ」
つぶやきながらも、ステップを踏んで後退した。目の前でゴブリンの長い爪が空を切るが、
「ちっ」

狭い地下室。背中が壁につくのを感じた。次は避けられない。
両手で2つ防御魔術を描いてもいいが、描く動作と詠唱があるため相手より発動が遅い。最速の防御魔術でも次を発動するまでに、無効化されるだろう。
ならば片手で攻撃魔術、片手で防御魔術か。どちらを無効化されるかは賭けになる。発動した瞬間に、わきに逃げられればいいが。
一瞬で思考を回転させ、1撃くらう覚悟を決めながら、指先をかざす。
「ルハナンさん！」
呼ばれて顔をむけると、リュウが白い紙を投げたのが見えた。こんな状況でも笑ってしまう、ちょっといびつな魔術陣。
『エタトニフ！オガコネザク！ウルーエボヌジム！エバコニット！イオーネザクッ』
火の盾、風の籠、水のベール、土の壁。4属性防御魔術＋攻撃吸収魔術。魔術師の十八番は、早口言葉だ。
魔物に4属性防御は効かないが、無効化させる数を増やせる。時間稼ぎだ。
魔術陣を唱えながらも、両指先は次の攻撃魔術を完成させた。
ゴブリンも素早く、最初の火の盾を無効化されるが、わたしの方は、後は唱えるだけだ。
『アビアヨネザク、エテサローク』
「ぎぃがぁぁあ！！！」
2つ目の風の籠が無効化されると同時に、風の刃で紫の霧が出ている両指を落とし、右手だけを凍らせる。
まだ終わらない。
『エテサローク、エテサローク』
左手、右足が凍りつき、
『エテサローク、エテサロークッ』
左足と頭が凍る。
仕上げは、

『二ミウス・オティエル！！！』
五体を氷らせて始めて使える大魔術、冷凍睡眠。
ひときわ大きく空間を割る音と同時に、ゴブリン全体が氷の中に閉じ込められる。オブジェの完成だ。
わたしは壁にもたれて、ようやく深呼吸できた。早口はいいけれど、息を吸う暇がなくて軽く酸欠。
「ルハナンさんは、やっぱり優しいですね」
褒めているのか、甘いとたしなめているのか。
リュウのほっとしつつも複雑な表情を見ると、その両方だと思う。修羅場慣れしており、解毒剤を持ち歩く。リュウはどれだけ甘くない環境で生きてきたのだろう。
「後味が悪いのは嫌なんだ」
ぽんぽんと、ゴブリン入りオブジェを叩いて答えた。
見た目はただの凍り魔術と同じだが、中身がちがう。魔術を施した人間が解かない限り、ゴブリンはそのままの状態で眠りつづける。老いることもなく――死ぬこともない。
殺すのは簡単だった。2つ同時に攻撃魔術を放てばいい。攻撃力の高い火精霊なんてちょうどいいかもしれない。
ぎごーっと音を立てて、重い扉が開いた。
上の部屋にいるはずのロトスとリンテルが飛び込んでくる。足音がしなかったから、きっとずっと扉の外にいたのだろう。
「キリハくんは……？」
「氷漬け始めました」
「氷の中で眠っているだけです。生きていますよ。ルハナンさんが解かない限り眠り続けて――生き続けます」
投げやりな説明にリュウが補足を加えてくれた。
「ありがとう。殺さないでくれて、ありがとう！」
リンテルが氷オブジェに抱きついた。冷たくないのか。そして中身はゴブリンですが。
愛とやらに呆れながら、ずるずると壁に背をつけて座りこむわた

しを、ロトスが支えてくれる。
「大丈夫か」
「自分を殺そうとした人にそんなこと言われると複雑」
まだ許したわけじゃないぞ。睨みつけると、真摯に頭を下げられた。
「すまなかった。魔物になったやつは殺せ。そう言われて、４つのときに両親が殺されたんだ。もちろん放っといたら、俺たちが死んだんだがな。だからどこからか弟のことがばれて、お前たちが殺しにきたんだと思った」
あいつしか家族がいない、か。
「殺すべきだとわかっていた。傭兵やってりゃ人殺しなんてざらだ。俺の手で殺してやりたいと思ってた。今まで決心がつかなかったけどな」
寂しげに笑って、わたしから離れ、オブジェへと向かう。
手にはいつ取ってきたのか、長剣をたずさえて。
「もう戻れないなら、いまここで俺が楽にしてやるよキリハ」

5話：犯行の原因（後書き）

わたしは先端恐怖症です。ビューラー持つ手が震えます。
ようやく火の魔術ができました。嫌ってたわけじゃないんですが、出すタイミングが難しいです。

お気に入り登録ありがとうございます！ご期待に添えるよう、精進してまいります。

6話：魔女さまと氷の漬物

ちなみに、長剣では大魔術の氷は壊せない。そんなに簡単に壊れると思われるなんて心外だなあ。単なる氷の術なら壊れるけど。

こういうところがロトスは単細胞っていうか単純っていうか直情的っていうか。第一、なんのためにわざわざ大魔術を放ったのか考えてほしい。

リュウも背中かどこかが痒そうな顔をしている。

そんなことはさておき、思いつめた表情で、氷漬けゴブリンに向かい合うロトス。リンテルちゃんは庇うようにして、さらに氷にしがみついた。

「だめです。キリハくんが死ぬなんてだめですっ」

「どけ」

「だめです！なら私も斬って！」

「いいからどくんだ！」

脅すように低くつぶやいてロトスが剣を構える。リンテルちゃんも負けじとロトスを睨んだ。二人の間に沈黙が流れる。

えーと、なんだか盛り上がっているけど。

「あーちょっと失礼。戻れるかもよ？」

庇うようにオブジェにしがみついていたリンテルちゃんと、かっこよく決意していたロトスが驚いて振りかえる。

「本当に？本当にですかっ」

「その場限りの嘘はいらん。慰めもいらんぞ。戻すというが、どうする気だ！」

喜ぶリンテルちゃんと、疑うロトス。

「さあてね。わたしもやり方知らないんだ」

リュウが不安げにこちらを見てくる。知らないものは知らないか

ら、肩をすくめてみせた。
「やはり嘘か」
「かもって言ったでしょ。キミそんなに挑発に乗りやすい傭兵って駄目だと思うよ？」
可愛くないロトスは素通りして、リンテルちゃんの肩をたたく。
「２０年前、どうしていきなりこの病気が消えたか知ってる？」
「『大泣きの』魔女さまが、奇跡を起こしたって……」
「そ。わたしの師匠はその魔女」
師匠が『大泣きの』魔女と呼ばれるのはその偉業のためだ。魔術を操り、偉業を成した女性だけに与えられるのが魔女の称号であり、大陸史上６人目の魔女が師匠である。わたしは彼女をずっとそばで見てきて、ずっと魔女に憧れてきた。
「えええ？」
「足で魔術を行うのか、魔女は！？」
そうです。イメージを壊して申し訳ない。歴代魔女６人とも、偉業に反し、実生活では残念な人だと伝えられている。わたしの夢は魔女と呼ばれることだけど、史上はじめてのまともな魔女になりたいなあ。
「今、絶賛蒸発中だからいないけどね。奇跡の起こし方なんて習ってないし」
聞いてみたことはあったが、教えてくれなかった。彼女が教えてくれたのは、むしろ毒草への耐性とか、怪しげな体術が主だ。
「だけど、クレイズさんちのお嬢さんも、パン屋の見習いくんも。たぶんわたしの母も。みんな、師匠の奇跡で戻ってきた人、だよ？」
記憶喪失になるという弊害はついたけれども。記憶喪失中であろう母は行方不明だけれども。
望みがなかったならキリハくんも殺してた。だが前例があるなら、とりあえず待てばいい。
「師匠探しつつ、わたしも暇つぶしに方法考えてみるさ。馬車の中って退屈だしね。それまで、キリハくんは眠ってなよ」

ゴブリンに手を振って、２人の反応を見ずに地下室を出た。
そのまま地下室にいると、質問攻めにされるか感動タイムに突入しそうだったからだ。
リンテルちゃんもロトスも、周りを置いて当人たちだけで盛り上がるから、ちょっとついていけない。
さすがに今日は魔術を連発しすぎたから、さっさと寝よう。
とりあえず、一件落着だよね？
残された深刻な話題は、また明日。明るいところですべきだ。
前回の魔物の話とか病気の話とか魔術師の話とか。あとは――２０年前でもないのに記憶喪失なリュウの話も。

＊＊＊

「ところでさ、何かお土産になるものってないかな？できれば、全然使い道ないやつで。もらった人が微妙な顔しかできないやつで」
翌日。宿屋のロビーで出発まで寛いでいたわたしたちに、謝罪とお礼に来て何十回も頭を下げる痒い２人に尋ねた。氷の中で眠り続けるキリハくんを見守ることに決めたらしい。それはいいとして、周囲の目が痛すぎるから土下座はやめてもらいたい。可愛い子と厳つい傭兵の二人に半泣きで謝られるとか拷問ですか。
お土産が旅の必須事項にされたので、探さなくてはならないし、それなら地元民に聞くのが一番いい。カシの大産地で名高い街ならば、何かまずいカシ料理や郷土料理があるのではないかと期待している。ちょうどいいものがあったら、昨日のことはそれで許そうかな。
リュウは、あきれたようにこちらを眺めている。うん、純真なリュウにそんな顔されると傷つくなあ。でもあの馬鹿王――もとい、おっさんに言いたい。強制された土産なんていいものもらえないぞ、と。そういうのは日頃のお付き合いと、挨拶と、お近づきの印の賜

物であるべきだ。
　二人は、こんな質問にも真剣に唸りだした。恩を売ってあるって便利だ。
「ええと……カシを蒸して作るガルジェ料理は激苦で有名ですが。日持ちしないんです」
「あれはどうだ。昔売ってた可哀そうなあれだ」
「ああ、あれですね！」
　ちょっと待っててくださいと言って、リンテルはカウンターの奥へ消え、ほどなくして足音を弾ませながら戻ってきた。
　胸に大事そうに抱えられているのは、手のひらサイズのぬいぐるみだ。
「カッシーくん人形です！」
　ただし、果てしなく不気味な。
　カシの穂の涙型である輪郭はいいとしても、目が下に孤を描いた半円で、黒い瞳は投げやりに明後日の方を向いている。カシの色は黄色のはずだが、暗いところでも光そうなギラギラした濃い黄色になっている。口や鼻はなく、穂から適当に４本の手足がぶら下がっている――力なく、だらんと。
「観光事業を盛んにするためにキャラクターを作ったんですけど。気持ち悪くて客足が遠のいた原因なんですよ」
　注文に沿うものを見つけられた嬉しさからか、にこにこと笑いながら説明してくれた。そもそも穀物の大産地は観光名所になれるはずがない。売れ残った品物が、商家の倉庫にあふれているらしい。
　わたしがにやりと笑ったのに気がついたのは、リュウだけのようだ。

＊＊＊

「王妃よ、いったいどこから間違えたのだろうな」
「陛下が余計なルールを追加したときですわね」

「これはあの子が元気でいる証拠だろうか」
「陛下が恨まれてらっしゃる証拠だと思いますわ」
「１つ王妃に進呈しよう」
「もったいなくて受け取れませんわ。胸がいっぱいになって、うなされそうですから気持ちだけありがたく」
「どこに置けばいいのだ……」
「ベッドで添い寝して差し上げては？きっと喜びますわよ、この部屋いっぱいのカッシーくんたち」
「一体どんな気持ちを込めて、郵便馬車の最速スピードで届けさせたのか……」
「きっと、『強制された土産なんていいものはもらえないぞ』ってあたりですわね」
「王妃はあの子のことをよく理解しているな。感動ものだ、ああ、本当に涙が出る……どうしようこれ」

広い謁見の間を埋め尽くすほど――いや、実際に埋め尽くしているカッシーくん人形を眺めながら、王が顔を覆った。
王妃はくすくす笑いながら、添えられたメッセージカードに目を落とす。
「もちろん、理解しています。見守るってイリファとユレと私の約束ですもの」

「魔病再発。原因不明。至急『大泣き』の魔女を呼び戻されたし」
メッセージカードの内容が、かわいい魔術師の照れ隠しでありながらも、本当のことであると、もちろん王も王妃も理解していた。

7話：魔女さまとお参り

旅に暮らすものは、出立に際し、その街の神殿へ挨拶に行くのが礼儀とされている。街への感謝を示し、これからの旅の安全を祈るためだ。

茅葺き屋根のくすんだ色の家々の奥、コロムの街の北に、白石造りの小さな神殿が隠れていた。

店中のカッシーくん人形を買いあさり、王宮へメッセージ付きで送りつけた後、キャラバンの人々と合流した。一緒に神殿へ入り、一人ずつお参りする。

円形の室内の中央には、聖水を湛えた祭壇がある。祭壇の真上の天井は、石がそこだけくり抜かれ、代わりにステンドグラスがはまっている。ステンドグラスを通してそそぐ鮮やかな光が、祭壇を照らす。

特別凝っているわけでもなく、一般的な神殿だ。

お参りの順にも礼儀があり、一番手は精霊魔術師のわたし。

1礼して祭壇に進み、大陸神ユランが好むという白いモアの花弁を1枚、聖水に落とす。波紋が完全に消えたのを見届けてから、1歩下がってまた1礼。今度は北を向いて土の精霊に1礼。これで完了。

キャラバンの列に戻ってから、こっそり深呼吸。信仰心薄い師匠のおかげで、王都の神殿へはお祭りのときしか行かなかったから、お参りの手順はうろ覚え。なんとか失敗せずに済んでほっとした。

続いてキャラバンの人々が、年齢順にお参りしていく。気負った様子もなく祭壇に向かい、慣れた手つきでお参りすると、終わった人から馬車へと戻っていった。ちなみにロトスは、キャラバンだが地元の人間なので、この街の神殿で出立のお参りをする必要はない。

最後は、光魔術師のリュウだ。

同じ手順なのに、洗練された非の打ちどころのない所作は、やっ

ぱり神殿の島出身だなあと感心させられる。これが、美少年だからまた似合う。
けれど、リュウは信仰心厚いというわけではないと思う。なにかにつけて大陸神の教えを垂れ流したり、寝る前食べる前と大陸神に感謝を述べたりしないから。それはまあ知り合いの神官と比べるとって話だけれど。お参りは上手だし、礼儀もしっかりしているけれど、信仰心云々より神殿の厳しい躾のためだろう。
なによりリュウは、殺生を厭わなかった。たとえ魔物や悪人に対してでも、躊躇するのが一般人。慈悲を施すのが神殿関係者だ。ちなみにわたしはケース・バイ・ケース。
「ルハナンさん」
考えているうちにお参りを済ませたリュウが、こちらを振り返った。
「あ、終わった？行こうか」
「はい。あの、質問なんですけど。どうしてこの街と王都のステンドグラスは黄色と白色だけなんですか？」
天井のステンドグラスを指しながら、首を傾げている。
「神殿の島ではどんなのだった？」
「黄色もありましたけど。青と赤と緑もありました。デザインは同じで、中央にユラン様がいらっしゃいました」
リュウの言うとおり、黄と白の2色でできたステンドグラスの中央に、大陸神ユランの姿が描かれている。勇ましいより、優雅、雄大と言うのが似合うドラゴンだ。
「ちょうどいいから、精霊のお勉強ー。本来、精霊に属性はあっても色は決まってない。小さな精霊は空気に溶けてて、目に見えないからね。でも火精霊って言ったら赤い炎を思い浮かべちゃうでしょ。だから、土は黄、火は赤、水は青、風は緑が信仰色」
「ユラン様は白いドラゴン。じゃあこのステンドグラスは、土精霊とユラン様を表してるんですか？」
打てば響くようなリュウに教えるのは、とても楽しい。手がかか

る子ほど可愛いなんて言ったのは、誰だろう。
「そう。トトロフ王国に加護をくれるのは土精霊。土の恵みたっぷりのおかげで、コロムは穀物の名産地。他の精霊も忘れてないけど、ステンドグラスは高価だから、2色で済ましてるところが多いかな」
「他の国では、違う2色なんでしょうか」
「さあねー？わたしも行ったことないし」
それは後のお楽しみと、笑って天井を眺めた。その笑顔のまま、尋ね返す。

「ねーリュウ。神殿の島には資料もあるし、元魔術師はたくさんいるでしょ。魔術使わなくても教えられる基本や、修行をどうしてしたことないの？」
リュウが静かにわたしを見た。
わたしが教えられるのは精霊魔術で、リュウの使う光魔術ではない。魔術に共通の基礎は教えられるが、それ以上のことは専門家に聞かなければわからない。どのみち限界はあり、わたしが教えることの大半は実技より知識だ。それならば、神殿の島にいくらでも元魔術師がいる。わざわざ面倒な長旅をする必要なんてないのだ。
「あともう一つ。20年前でもないのに、記憶喪失してるのは何で？」
なんとなく顔が見れなくて、無駄に天井を見詰めたまま、たたみかけた。
リュウは、いい子だ。それは分かっている。
だから答えてくれなくても、はぐらかされても、旅をしていくつもりで、それは変わらない。
ただ、ちょっと気になるのだ。リュウも、いつか聞かれることはわかっていただろう。
「記憶喪失の原因は、わかりません。ぼくにある記憶の中で、一番最初は2年前です」
「2年前……」

師匠が蒸発した年だ。関係なくても、少し思い出してしまう。
「ぼくは、神殿の島の最奥、神官長と長に許された者だけが入れる祭壇に倒れていました。覚えていることは何もなくて、言葉もありませんでした」
驚いて、リュウを見つめる。柔らかな緑の目は、いつも少し寂しそうだと思う。タレ目だからかな。
魔病後の記憶喪失では、言葉や生活に関する記憶が消えた人はいない。それでも、彼らが苦労しているのを見てきた。
「そんな状態でしたけど、見つかった場所が場所だから、ぼくは特別親切にしていただきました。その祭壇は、神官長がユラン様からお告げをいただく場所なんだそうです。警護も万全でネズミさえ入れない場所にいたのだから、ユラン様から託されたのだ、と」
普通の場所だったなら、悪くて侵入者扱い、よくて孤児扱いだったろう。
「名前をいただき、言葉も教えていただきました。ちゃんと生活できるようになるまで、1年もかかりました」
「いやいやいや、1年ってすごいと思うよっ」
「けれど、その後の1年、ぼくはすることがなかったんです」
リュウは苦笑して目を伏せながら、つぶやいた。
「身分もあやふやでした。一応、神殿の最上級の賓客として扱われました。でも、実際はどこの誰だか分からない人間です。神官にして内部を見せるわけにいかない。ただの孤児なら下働きにするのに、それもできない」
「光魔術の素養があっても、教えられない、か……」
話が掴めてきた。
魔術師は、その技術を身内にしか教えない。わたしも国王の口添えがなければ、リュウに基礎さえ教えなかっただろう。
中途半端に習得し、もぐりの魔術師となる者を防ぐためだ。大きな力を持つ分、きちんと把握され統制下になくては、危険な存在だ。貴重な石のピアスをさせ、一目でそれと分かるようにするほど。こ

のピアスは証であり、鎖だ。
「神官長様も悩んでらっしゃいました。実際、光魔術の人手は必要です。けれど、自ら教えることはできません。陛下のお言葉があっても、神殿では周囲の目があります。だからぼくは、ルハナンさんに預けられたんです」
「体のいい厄介払いか。ついでに魔術を習得すればラッキー。光魔術師は、即神官になれるから、身分も確定できてリュウにもお得、と」
「……ごめんなさい」
いやー、そこで謝られるとわたしが利用されたみたいじゃないか。なめてもらっちゃ困る。
「待て待て。わたしに実害ないからね？女の一人旅が危険な世の中だし、リュウは気が利くし。その代わりリュウも魔術を得て、契約完了。わたしたちの間には、神殿は関係ないよ？」
「そう……でしょうか」
わたしにも利があるから、一緒に旅をする。善意でもないし、貧乏くじでもない。
「どうせ一緒に行くなら、わたしはリュウで良かったと思うよ？」
むしろお得な買い物だったかも。そう言うと、リュウが照れたようにほほ笑んだ。こんな時にあれだけど、やばい、可愛い。これがはにかむってやつだろうか。
「ぼくも、ルハナンさんで良かったです。旅が終わるまで、ずっと一緒に頑張ります」
ほら、こうやって人が欲しい言葉に気づいて、さりげなく言えてしまう。こんな少年なかなかいないよ？
『リュウ』は古語で、意味は『光』。どんな神官がつけたか知らないけど、ネーミングセンスは、褒めてやろう。

7話：魔女さまとお参り（後書き）

説明文多いー！メンドクサイところは読み飛ばしてもいいと思います。

お参りの手順って間違えますよね。２礼２拍手１礼、あれ、お賽銭投げるのはいつだっけ。手を洗うのも手順あるんですよね、左手、右手、口、左手ですっけ？

章設定できるようになったので、ちょこっといじりました。

＊４：３９分修正。最初のほうと、最後のほう結構いじりました。

8話：魔女さまの旅行プラン

黒い。

それが始めてみる国境の第一印象だった。

コロムの街から馬車で5日、山を越えて谷を越えてもう一つ山を越えたところが、トトロフ王国西の国境線である。

高い石壁と門が国をわけている証だ。長い年月風雨にさらされてきた石壁は、夕刻のせいもあってか、一段と黒ずんで見えた。

「なんだか、物々しい雰囲気だねー」

馬車から降り、宿屋に向かいながらキョロキョロと街を眺める。夜には門が閉まるため、今日はトトロフ側の街で一泊する予定だ。

石壁の上にカラスが飛び交い、不吉な鳴き声で喚いている。国境の街は、コロムのような安穏とした空気もなく、王都のような活気もない。大通りもすでに店は閉まっており、閑散としていた。

「いや？普段からこんなものだ。王都やコロムが賑やかなだけだろう」

わたしの感想に、先を歩くロトスが驚いて振りかえった。ロトスの肩でリュウの荷物が軽く跳ねている。ちなみにリュウは長旅に疲れ切り、街を見る余裕もなく、ふらふらと後ろを歩いている。3日間は馬車で野宿だったため、仕方ない。見かねたロトスが荷物を預かってくれたけれど、どうせならリュウごと背負えばいいのに。厳ついんだから。

コロムの街での事件以来、ロトスは何かと面倒を見てくれる。弟やリンテルちゃんみたいな妹分がいるから、世話焼きな性分なのかもしれない。有難いけど、少々口煩いところが、兄貴っぽい。

「そんなもんかな。わたし、王都周辺以外は見たことないしなあ」

「そんなものだ。特に、ここは獣人との国境だ。人間が暮らすには辛いこともあるだろうな」

「そっか。獣人族はわたしたち嫌ってるらしいね」

「ああ」
ロトスは同意するようにうなづきながら、溜息をついて立ち止った。
視線につられて後ろを振り返ると、寝ながら歩いていたリュウが派手に転んでいた。

「よし、いい飲みっぷりだなじょーちゃん！将来有望だー！」
「ばーろー！じょーちゃんはこう見えても魔術師さまなんだぜ！有望なんてのはとっくにわかってんだよー」
「寂しくなるなー。うちでまた働いてくれよー」
熱気のこもった酒場を乗っ取り、次から次へと酒を注いで注がれて注いで。
こういうあまり上品でない宿屋の1階は、たいてい小さな酒場がある。ロトスにリュウを運んでもらって、ベッドに寝かしつけてから、大人だけで集まった。
キャラバンの皆が開いてくれた、わたしとリュウ（不参加）へのちょっとした送別会だ。
明日国境を越えたら、キャラバンとのお仕事は終了。一週間ほどの短い仲間だったけれど、親切にしてもらった。その分、盗賊に出会ったらしっかり叩きのめして馬車代分は働いた。
キャラバンは、国境の先の街、大陸一の商業都市トリッシュで荷を売り、銭を得て、王都へ帰る。帰りがてら、コロムに寄ってちょうど収穫されたばかりのカシを仕入れ、王都で売るらしい。ロトスはキャラバンお抱えの護衛だから、もちろん一緒に王都へ帰る。
「おい、あの小さい小僧はどーした？」
「もー潰れたのか？酒飲まんと大きくなれんぞー！」
「旅疲れで寝ちゃいました！未成年にお酒はだめです！」
周囲の喧騒に負けないように、叫びながら話す。トトロフの法律ではお酒は成年16歳からだ。

リュウは見た目１２，３歳だからまだまだ先。ちょうど寝ていて良かったと思う。お酒も駄目だけれど、まずこの宴会のノリにリュウがついていけないだろう。
街の様子が暗くても、宴会の賑やかさには全く影響しないようだ。お酒の力って偉大。
わたし自身こんな賑やかな宴会は初めてで、目まぐるしくって誰と何を話しているのかもわからなくなってきた。
王宮の晩餐会でお酒を飲んだことはあるんだけどな……。もっと静かで、落ち着いていた。その分参加者たちは、下らない策略を企てたり、下心有り余る交流をする余裕があったが。
ここで飲むのは違う。熱気と喧騒、お酒と人ごみでぐらぐらしてくる。
オマケに何故か料理が辛めで脂っこい。
四方八方から声をかけられるので、いちいち返事ができない。
「じょーちゃん達はこれからどーすんだ」
「お前、野暮なこと聞くんじゃねえ。見りゃわかるだろ」
「若いからって反対されちゃ、逃げたくもなるわな」
「だけどな、落ち着いたら親御さんにも連絡してやれよ！」
「若いっていいなあ……」
なんだか凄まじい誤解を受けている。せめて血の繋がらない兄弟とか孤児とかのほうが分かる気がする。だってリュウはまだ子どもで……。
反論しようと口を開くけれど、頭がぼーっとして言葉にならない。えーっと、何て言いたかったんだっけ。
ジョッキを片手に口をぱくぱくさせていると、いささか乱暴にジョッキを取り上げられた。
「ちょっとまら飲んでまふ！」
「飲みすぎだ」
「……はい」
厳つい顔で眉を顰めたロトスは、迫力満点だ。ちょっと酔いが醒

めたかも。
「おいおい、まだ飲もうぜ！お開きにゃ早いよ」
周囲の反論を一睨みで黙らせる。
「明日はトリッシュに着きます。忙しいでしょう。早く寝ないと持ちません――行くぞ」
ジョッキを求めて伸ばしたを掴まれ、有無を言わさず客室に戻された。

翌日。
「あー。頭痛いー」
初めての国境越えは、呻き声を上げながらとなった。
乗り慣れた狭い馬車とも今日でお別れだ。感慨に耽りたいところだが、振動が頭に響いて痛い。
「酒に弱いなら早く言え」
リュウが心配そうに、水筒を手渡してくれるけれど、その隣ではロトスが呆れて小言を垂れている。ロトスに呆れられるなんてちょっと癪だ。
「弱くない。今までこんなに酔ったことなかったんだもん」
「強い酒を飲んだことがなかっただけだ。もう飲むなよ」
後で聞いた話によると、王宮で飲むものはお酒の種類が違うらしい。そういえば、王宮で出されるものは、普通の果実水のようだった。昨日のお酒とは全く違う。昨日のお酒は、なんというか、グワッと来て、匂いもきつい。
「こんな風で大丈夫なのか。国の外は治安も悪い。十分気をつけろ」
反論できずに、黙っているとさらに小言が追加される。朝起きて、二日酔いを訴えてから、ロトスはずっと小言状態で、リュウはオロオロしている。
「ぼくは国外初めてなんですけど、ロトスは行ったことあるんですか」
話の矛先を変えようと、リュウが口を開いた。優しい子だよ全く。

「ああ。国境の隣のトリッシュは、キャラバンで年に2，3回は行く。その先には一度しか行ったことがないな」
「その先？どんな街があるんですか」
「……おい、話してないのか」
ロトスは質問には答えず、じろりとわたしを見る。
「……話してないというか、決まってないんだよね。これからどうするか」
気まずくなって、答えてから水筒に口をつけた。もうしゃべりたくないから、ロトスが説明してくださいアピールだ。
今日31回目にして最も大きな溜息をつきながら、ロトスはリュウに向き直った。
「その先に当分街はない。東西に渡って馬鹿でかい草原が広がっている。獣人たちが一族ごとにまとまって生活してはいるが、遊牧して暮らすからな。正確な位置は分からん」
「え、それじゃあこれからどこへ行けば？」
「ルハナンに聞け」
リュウの真っすぐな視線が痛いです。
いや、ノープランってわけじゃないけれど、漠然としてるんです、はい。
「ええとね、とりあえず、この旅では、四大精霊に挨拶回りしなくちゃいけないでしょ？草原のどこかに、獣人族へ加護を与える風の大精霊がいるはずなのよね。そこを目指したいんだけど、大精霊の居場所ってのは聖域でして、汚されないように秘匿されてまして。はい。行き方、分からないんです」
「……」
「あ、だけどね？トリッシュって大陸で一番大きい商業都市で、人もたくさんいるし、情報集まるかなって。あ、あは、あはは……」
「計画性って言葉を知ってますか」
「はい……」
「任せきりにしたぼくも悪かったです。これからは一緒にきちんと

綿密な計画を立てましょうね」
「はい……」
眉間に皺一つ立てずに、迫力を出して怒る人を初めて見ました。
いや、むしろこれは叱られているんですか。
年下の子に頭を下げていると、馬車が大きく揺れて止まった。
前方でなにやら会話がなされ、しばらくすると、何事もなかったかのようにごとごとと振動を立てながら発車する。

こうして今、国境を越えた。

8話：魔女さまの旅行プラン（後書き）

長らくお待たせしてすみません。いろいろ詰まってました。
ここからはスピードあげたいと思います。
とりあえずお兄ちゃんゲットー。意外に行き当たりばったりな新しい妹にハラハラさせられてますね。

9話：魔女さまのシックス・センス

お別れは、キャラバン取引先であるトリッシュの一角、それなりに大きい商店だった。
荷を運び入れる間、護衛をして終了。特にトラブルもなくて良かった。
商店の軒先で、改めて挨拶をしてくれたのは、キャラバンの隊長さんだ。３０に差し掛かる程度の、隊長にして若い快活な女性。
「あんたらの仕事はここまで！１週間よく働いてました。御苦労さま」
「お世話になりました」
リュウと一緒にぺこりと頭を下げる。機会があればまたお願いするわ、と声を掛けてくれた。忙しい方なので、そのまますぐに商店の中へ戻ってしまった。
ふーっとなんとなく溜息をつく。ここからは再び、というか初めての二人旅だ。
「とりあえず宿探そっか」
「はい！」
どちらともなく笑いあって、大通りへ足を向けた。

一つ角を曲がって通りへ出ると、気づけば人の波に呑まれていた。
南北に伸びた広い道の両脇は、ありとあらゆる種類の商店が立ち並んでいる。家は白い土壁で作られ、街全体が白く見えるほどだ。しかし立ち並ぶ商店の前列には、天幕を張り地面に布を敷き、所狭しと商品を並べて作った色とりどりの露天がひしめいている。色の対比が鮮やかだった。
露天で立ち止り物色する人や、商店を見て回る人々。大声で行きかう人に声を掛ける商人たち。怪しげな謳い文句で客寄せする人。

買い物の休憩に、道の端で談笑する人。
人々の顔はどれも明るく楽しそうで、輝いて見える。どこからともなく笑い声が響いており、流れは目まぐるしいほどだ。
「すごいです！王都でもここまで賑やかじゃありませんでした！」
珍しく頬を紅潮させ、興奮しながらリュウがはしゃいでいる。わけもなく人を浮かれさせる空気がここにはある。
「活気っていうか、雑多っていうか……。獣人族も人間も多いねー。まあここは獣人族の領土だから」
「獣人族……あれが、そうなんですか。初めてみました……」
ジロジロ見すぎないように気をつけながら、リュウが観察している。
神話にある通り、遥か昔ゼラハト大陸に住む人々は、別の大陸から戦火に追われて移住してきた。その時この大陸に移った中で、自然と共に暮らす種族が獣人族だ。彼らは国を造らず、血族ごとに集まって遊牧するのが基本だ。トリッシュだけは例外で、ある血族の獣人が起こした定住型の新しい街になっている。
そんな彼らの特徴は……
「はーもー！かわいいー！獣耳っ、生の獣耳としっぽぉおおお」
「ちょ、ルハナンさん落ち着いてください！目立ってます！」
そんな彼らの特徴は、わたしの好みなのだ。猫耳と尻尾！あっちの子はキツネ耳！もっさりした黄金色の尻尾ー！あ、兎耳っ。血族によって色んな種類があるんだよねー。あああ、犬耳ぃ。
奇声を上げながら感動するわたしを、通り過ぎる獣人はちらちらと不審そうな眼で見ている。見ながら、わたしが人間だと気付くと、誰もが慌てて視線をそらした。
獣人族の多くは、人間の地へ来ることはない。昔、人間が侵略戦争を起こし、彼らの草原を無残な戦地にしたからだ。……人間すごく嫌われてます。自業自得ですけど。
そんなわけで、わたしも獣人を見るのは初めてだ。興奮しても仕方ないだろう。

「だってリュウ！あれ触りたいよっ。尻尾動いてる！」
「わ、分かりましたから。とりあえず、深呼吸してください」
せーの、すーはー……。
リュウの合図で一緒に深呼吸してから、改めて大通りを歩き出す。はしゃぎすぎてごめんなさい。ちょっと反省。でもかわいいものはかわいいのですよ。
「これだけ人が多いなら、情報もたくさん集まりそうですね」
「まずは聖域について。それから、できれば例の病気と、師匠の捜索。あとは魔術師の魔力が弱っていることも聞きたいな。宿屋を取って、露店を回って買い物ついでに情報集めしましょ」
指折り数えてげんなりする。これだけの情報となると、数日は滞在するかもしれない。できれば安上がりでしっかりした宿をとりたいが、見れば旅行客や観光客も多そうだ。宿屋にどれだけ空きがあるか不安になってきた。

＊＊＊

「あー。6連敗！リュウの方で取れてるといいけど」
案の定、満室という返事を五回聞いたところでリュウと別れての宿探しになった。集合は大通りにつながる三叉路前だ。
日を振り仰ぐと、ちょうど真上に上っており、影が一番短くなっていた。真昼だ。夕刻までに見つからないようなら、国境門を出て、トトロフ側で宿にした方がいいかもしれない。昨日の閑散ぶりならば、宿も空いているはずだ。
それまでは頑張るかと、溜息をついて立ち上がる。気合を入れなおしたところで、
「駄目だろうな」
「……いきなり挫かないでよ」
後ろからの聞き慣れた声に全否定された。

浮ついた空気の中でも、重低音を変えない人物は、紛れもなくロトスだ。
「お仕事はどーしたの」
「終わった。キャラバンは明日から3日間ここで商売するからな。今日は準備だけで終了だ」
「明日から何かあるの？って聞くまでもないか。お祭りの雰囲気だ」
いくら大陸一の商業都市だからといってここまでの活気が通常というわけでもないだろう。変なモニュメントとか出てるし。歌って騒ごう！って書いてある垂れ幕下がってるし。
「毎年恒例の祈年祭という。遊牧民の冬は厳しいからな。秋までの生活に感謝し、冬を乗り越えるため祈りを捧げる」
「っていうのが本来で、今はただのバカ騒ぎね」
ただただ楽しみにするような空気だ。祭祀の厳粛さは微塵も感じられない。
「良いことだ。それだけ冬を乗り越えられるようになったんだ」
目の前を、仲良く獣人の親子（キツネ系！）が通り過ぎていく。しっかり手をつなぎながら。
元々、別大陸時代の遊牧が厳しかったらしい。現在のゼラハト大陸の遊牧民は、風の大精霊に守られている。楽ができるわけではないが、命の危機は格段に減っているはず。
それはいいとして。こんなこと話してる場合じゃないんだってば。
「で。何か用ですかー？忙しいんだけど、宿探しに」
「昨日の様子からしてそうだろうと思ってな。人間が宿を取るにはコツがいる。俺は何回もトリッシュに来ていて知り合いも多い。少しは頼れ」
ぽんぽん頭をなでて、こっちだと言いながらロトスは迷わず先へ進んでいく。人ごみをすいすいと、ぶつかることなく避けていく。
頼れって……。君は先日わたしの命狙ってましたが。
長い脚でさっさと歩いて行ってしまうロトスを小走りで追いかける。なんとか横に並ぶと、ロトスが口を開いた。

「実は困ったことになっていてな。恒例のイベントで、どうしても魔術師の手ですることがある。今までは、金で雇った奴がいたらしいが、急に魔術が使えなくなったと。代理を探そうにも、最近は魔術師を滅多に見かけないからな」
「魔術師の魔物化に弱体化。災難な職業ねー」
「その筆頭が呑気なことだ」
「自分は大丈夫、なんて思ってないよ。ただ気をつけようがないでしょ」
情報がなければ対策の立てようもない。自分がいまできることなんてのは、限られているのだ。まだ修行の旅もクリアしていないひよっ子なのだから。
「それで？何をすればいいの」
「フィナーレを飾る演技だ。精霊と大陸神の神話の再現らしい。詳しいところは、宿屋の主が教えてくれるだろう。ここだ」
ロトスが立ち止ったのは、3階建ての中規模宿屋だ。周囲と同じ白い土壁に、緑の蔦が宿屋を飾っていて洒落ていながらも落ち着いた雰囲気だ。

「って、さっきここ断られたとこ！」
「大丈夫だ」
反論するわたしを置いて、ロトスは遠慮なく中へ入っていった。相変わらず1人で盛り上がるな。
断られた手前入りにくいなーと思いながら、こそっと様子を覗こうとすると、内側からいきなり扉が開かれた。
「この子が魔術師だ」
ロトスは扉を開きながら、わたしを示した。いきなりか。
「あ、精霊魔術師のルハナン・クロストです。ロトスさんからお話を伺ったので……」
「――まだ小娘じゃないか」
ばっさり切り捨てられた。入口のカウンターでこちらを品定めし

たのは、壮年の狼の獣人さんだ。良く言えば、ちょっと親方と呼びたくなる雰囲気。
「ロトスが言うから期待していたのに。当てにならん」
悪く言えば、頑固で取りつく島もない感じ。
ジロジロと見まわし、溜息とともに顔を背けた。そのままこちらを見ようともしない。
「若いが、優秀な魔術師だ。仕事にも真面目だ。どうせ見つかってないなら、いないよりマシだろう？報酬は、3日分の宿代でいいか」
最後の言葉だけわたしに向けられる。即座に頭を縦に振った。
「光魔術師も必要だぞ」
「この子の相棒がそうだ」
リュウがどこまでできるかは、仕事によるけれど。
ちょっと腹が立つけれど、ここで眼をそらしては、自分が仕事ができないと証明するようなもの。
じっと親方さんを見つめる。
「……仕方ない。3日後にもっといい代理が見つかったら出て行ってもらうぞ。それまでは好きにしろ」
「よろしくお願いします」
諦めたような態度だが、一応了承を貰って安心した。寝床はゲット。しかし、最初は空いていて断ったんだなこの宿屋め。
「部屋は2階の通り側を使え。……人間の魔術師なんぞに手を借りる祭りなんざ、堕ちたもんだ」
ぽつりと呟かれた愚痴は無視して、さっさとリュウを迎えに行こう。
連れを呼んできますと告げ、踵を返した時。

突然――

――リュウ

「痛っ」
ぱしっと音を立てて、ブーツの紐が弾けて切れた。そのまま緩む靴を覆うようにしてしゃがみこむ。華やかな街の喧騒が、遠くなっていく。
「なんだ!?大丈夫か?」
ロトスが慌てて駆け寄ってきた。
「……が」
「聞えない。どうしたんだ?」
「……リュウが危ない……」
「は?」
思わず間抜けな声をあげるロトスに、上手く説明できない。
でもこれは、リュウだ。確実にリュウのこと。
根拠もなにもないけれど、この感覚をわたしは知ってる。
昔からわたしには、よくあるのだ。
虫の知らせというやつが。

9話：魔女さまのシックス・センス（後書き）

寮暮らしをしていたとき、触れただけで茶碗が真っ二つに割れました。友人は慌てて実家に電話しろ！と叫んでました。なんともなかったんですけどね。

ようやく人外登場です。私的に、しっぽはキツネがいいです！耳はスコティッシュ（猫）で！

相変わらずリュウの出番は少ないです。はしゃぐのはリュウの予定だったんですが、主人公が先にフィーバーしたので出番減りました。

１０話：魔女さまの落とし穴

嫌な予感がする。リュウを心配する理由は、それだけしかないのに、居ても立っても居られない。

ロトスは何も言わず、リュウ探しを引き受けてくれた。わたしが探すとすれ違いや迷子になる可能性があるので、一人、集合場所でじっとリュウを待っている。

通り過ぎる人々を見逃さないよう、しっかり目を見開く。１２歳程度の修行服をまとう少年の情報を聞けないかと、耳を澄ます。

そうして、夕刻をすぎ、日が沈んだ。

王都よりは南に位置するが、大陸全体からみればどちらかというと北寄りなトリッシュの夜は冷える。なにより、風が強く、冷たかった。

それでも待ち続けるつもりだったけれど、来たのはリュウではなく、汗だくになったロトスだ。

息が上がっているロトスは、口を開かず、ただ首を横に振った。

「まだ、待つよ。ありがとう、ロトス。先に休んでて」

「……すまん、手掛かりはなかった。お前も今日はもう休め」

「いやだ」

「待っていても来ないだろう。明日にしよう。自警団には連絡してある」

「いやです」

即座に切って捨てると、ロトスが無言で睨んできた。負けじと睨み合う。

さすがに露店は店仕舞いだけれど、夜だというのに、街はまだ賑やかだった。大通りの建物のあちこちから、馬鹿騒ぎの声が聞える。けれど、その中にリュウの声はないのだ。

「祭り時の治安は荒れる。酒が入ったやつらが増えるからな。女が夜中に出歩くな」

「わたしを誰だと思ってるわけ。全部叩きのめしてあげるもの」
「……やめてくれ」
ナンパ程度でも大乱闘にしそうだ、とロトスは嘆息した。
何を言われようとリュウを待つ気でいたけれど、夜になっても現れないならば、やはり何かあったのだ。それならば集合場所にいても意味はない。
「ロトスはもう一度大通りを一周してきてくれない？それでも見つからなければ、今日はあきらめる」
本当だなと念を押されたので、くどいと返事をすると、ロトスは踵を返し、駈け出した。
うーん、恩を売ってあるって便利だなー。
さて。1人になったことだし、本格的に探しますか。もちろん、わたしの得意分野で。
少し移動して、大通りの十字路のど真ん中に立つ。本来は馬車が行きかう場所だけど、夜中は安全だろう。
冷たい夜の空気に指をかざす。
『エザク』『エザク』
両手で描き、街の東西へ向けて、風を走らせる。
『エザク』『エザク』
同じように街の南北へ風を走らせる。これで準備オッケー。先に別の魔術で準備が必要なのは、多くが大魔術と呼ばれるものだ。魔力をごっそり持っていかれて、発動が面倒くさいというシロモノ。
『イロヤト・ネザク』
ばきぃん、と派手な音を立てて大魔術が発動したのを感じた。
そっと目を伏せ、聴覚に集中する。
轟音の渦の中に放り込まれ――いや、自分から渦の中へ飛び込んだ。
「やだなあ無駄遣いしちゃった」「酒とつまみ、お代わりよろしく

！」「ぼく、お祭り楽しみなんだ」「今日は儲かったなー」「ご、ごきぶりよ、あなたー！」「トリッシュには人間が多すぎる！街の品位が疑われ……」「お疲れ様！今日はもう上がっていいわよ」「お父さん！邪魔！」「ここにもいない、か」「明日も早いな……」「見て御覧、綺麗な夜空だ。素敵だろう？」「お母さん、お姉ちゃんがー！わたしの人形とったー」「知ってるー？あの人ってホントは腹黒って噂」「お集まりの皆さま、御覧あれ！」「ごちそうさまでしたー！」「歩き疲れた。シャワー浴びてくるね」

様々な声が頭の中を横切っていった。

一度目を開けて、深呼吸。額をいくつも汗が流れて、べたべたする。

風の大魔術の1つ、風の便り。四方に風を送って、その風が聞きとった情報を集める魔術で、戦闘用ではなく明らかに密偵用だ。姑息な手段の上に、頭の中で音が響いて非常に疲れる。けれど、情報集めには手っ取り早いはずだ。

今のところ、リュウ関連の情報はなかった。ごきぶり大丈夫かな。お父さんに優しくしてあげてね、娘さん。ちらっとロトスの声が聞えた気がしたけど、まあいいや。

ロトスが戻ってくる前にもう一回。すごく疲れるから、ロトスに見られたら止められそうだし。

「このセクハラ親父！どきなさい！」「ちょっと寒い。窓閉めて」「馬の調子が悪くてさ、薬を……」「生で獣人族が見れるのってトリッシュだけだよね！」「団長ー、迷子の捜索依頼が来てます」「お嬢さん、占いはどうじゃ？」「もうすぐ草原も冬だ。ここで防寒具を買っておこう」「荷が重くてな。腰が痛いのう」「また明日ねー！」「ユ族は儲けているそうだ」「あ、このスープおいしい！」

「光魔術師だろう？それくらいできるはずだ」「私の新しい唄、聞いてください！」

――光魔術師。

そのワードに反応して顔を上げる。今や光魔術を使える人間なんて滅多にいないはず。この声を追えば、もしかすると！

声の方向は西だ。西にもう一度風を起こし、大魔術を放つ。

少し足元がふらつくけど、手掛かりさえ掴めればこんな疲労なんでもない。

はやる気持ちを抑えながら、再び目を閉じた。

＊＊＊

その時のわたしは、魔術師として失格だったと反省しています。ごめんなさい師匠。

風の便りを使う最中は、目を閉じている上に、普通の聴覚は遮断しているため、自分の周囲の様子は全く分からない。

使う時と場所を選べ、という教えを忘れていたわけじゃないんです。

そう、ただ、油断していたので。

近づいてきた馬車の中に、いきなり連れ込まれてしまいました。馬車が来ることにも気がつかなかったです。

これってもしかして、誘拐ですか。

２次災害起こしちゃいました。

困るのはきっと、ロトスでしょう。

１０話：魔女さまの落とし穴（後書き）

鈍足更新でごめんなさい！ようやく１０話です。すごい魔術師のはずが被害拡大。ロトスは将来はげるのだと信じています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4021o/

垣根の上のキミ

2010年11月20日02時40分発行